

〔文学篇〕

【翻訳】

《醒世姻縁傳》（第25回）訳注（其一）

植田均、石亮亮、佐々木奈央、邱杰

Notes to *Xingshi Yinyuan Zhuan* (Chapter 25.vol.1)

Hitoshi UEDA、Liangliang SHI、Nao SASAKI、Jie QIU

〔要旨〕

Xingshi Yinyuan Zhuan is a full-length novel with 100 chapters, written in Shangdong dialect. Its writer is from Shangdong Province but his name and life story still remain unknown. We annotate the words/phrases the novel and include ‘comparison’ this time. Modern Chinese Research Class students from Kumamoto University are investigating all the words/phrases occurring in the representative works produced in northern mandarin area in Qing Dynasty and currently are working on all the words/phrases from *Xingshi Yinyuan Zhuan*. That is to say, the essay aims to expound ‘the rate of a certain word/phrase corresponding to its meaning’, and researches on the quantitative linguistics with figures counting frequencies.

Textual Research of *Xingshi Yinyuan Zhuan* from *Hu Shi*(1993) and *Huang Suqiu* (1981) contribute greatly to the annotation. Recently the Historical Evolution of the Dialect of *Xingshi Yinyuan Zhuan* (Chao Rui, 2014) and Dialect Vocabulary Dictionary of *Xingshi Yinyuan Zhuan* (Hitoshi Ueda, 2016) have been published one by one.

キーワード：清代前期北方官話、口語、方言

凡例

- 一、底本：《重訂醒世姻縁傳》（同徳堂梓）、人民文学出版社影印本（1994年刊）
- 二、本稿の構成：一段落ごとに原文、訳注、日本語訳の順に並べた。
- 三、文字：《醒世姻縁傳》の文字は、極力底本通りとした。よって、当時民間で認知されていた簡略字が散見する。
- 四、日本語訳：日本語訳文は、語彙本来の訳義を考えるため直訳になるよう努めた。
- 五、校注の用例：『中国語大辞典』（角川書店、1994）、《白话小说语言词典》（北京・商务印书馆、2011）等から適宜引用。用例の頭に付す数字は各作品の章回数を示す。
- 六、略号：〔名〕名詞、〔代〕代詞、〔動〕動詞、〔形〕形容詞、〔量〕量詞、〔副〕副詞、〔介〕介詞、〔助動〕助動詞、〔接〕接続詞、〔助〕助詞、〔嘆〕感嘆詞、〔連〕連語、〔接尾〕接尾辞、〔書〕書面語、〔方〕方言、〔口〕口語、〔文〕文言、〔慣〕慣用語、〔成〕成語、〔諺〕諺語、〔逆序〕逆序語、〔同音〕同音語、〔同義〕同義語、〔擬音〕擬音語、〔誤〕誤刻、〔転〕転義、〔比較〕現代語または類義語との比較等。

受付日：2015年11月4日

受理日：2015年11月20日

《水滸》：《水滸傳》、	《金瓶》：《金瓶梅詞話》、	《聊齋》：《聊齋俚曲集》
《古今》：《古今小説》、	《恒言》：《醒世恒言》、	《警世》：《警世通言》
《喻世》：《喻世明言》、	《西遊》：《西遊記》、	《三國》：《三國演義》
《兒女》：《兒女英雄傳》、	《鏡花》：《鏡花縁》、	《儒林》：《儒林外史》
《拍案》：《初刻拍案驚奇》、	《紅樓》：《紅樓夢》、	《清史》：《清史演義》
《二刻》：《二刻拍案驚奇》、	《官場》：《官場現形記》、	《封神》：《封神演義》
《醒世》：《醒世姻縁傳》、	《宣和》：《宣和遺事》、	《老殘》：《老殘遊記》
《京本》：《京本通俗小説》、	《三俠》：《三俠五義》、	《清平》：《清平山堂話本》
《二十》：《二十年目睹之怪現狀》、	《西洋》：《三寶太監西洋記通俗演義》	

*第25回から注釈を開始したのは、全100回のうち、前半が終了し後半の第25回から別の物語の如き展開があり、重点もこちらに傾くからである。それでも、最終的には前半・後半がうまくつながるように仕組まれてはいる。なお、注釈は100回すべてを行う予定である。

原文

買鄰^[1] 十里^[2], 仁者^[3] 應^[4] 如是^[5]。況^[6] 逢^[7] 此等^[8] 佳^[9] 山水, 更^[10] 有何方^[11] 是美^[12]。
無煩^[13] 絳闕^[14] 瑤臺^[15], 只須^[16] 此便蓬萊^[17]。且^[18] 有女兒縁^[19] 在, 赤繩^[20] 暗地^[21] 牽來^[22]。

——右調《清平樂》

校注

[1] 鄰：[名] 古代には、五“家”を“邻”、五“邻”を“里”とした。《説文・邑部》：～，五家為～。

[2] “十”里：[名] 隣近所、古代には、五“家”を“邻”、五“邻”を“里”としたので、二十五“家”は“一里”となる、隣人。《尚書大傳》2：“八家而為鄰，三鄰而為朋，三朋而為～。”

[3] 仁者：[名] “有德行的人” 仁者、仁のある人。《紅樓》2：清明靈秀，天地之正氣，～之所秉也；殘忍乖僻，天地之邪氣，惡者之所秉也。

[4] 應：[助動] “应当；应该” …すべきだ、…するはずだ。[比較] 《醒世》に“应当”は1回、“应该”は9回、“应”は100回以上現れる。《醒世》の助動詞の“应”の特徴：(1) 助動詞“应”の後は常に動詞または動詞性構造のものがつく。(2) 否定副詞“不”の修飾を受けると、二重否定の形をとれない。(3) 単独では述語になれない。《官場》52：況且是故人之子，我們～得提拔提拔他。

[5] 如是：[代] “如此这么；像这样” このようである、かくのごとし。《紅樓》15：昔小王曾蹈此轍，想令郎亦未必不～也。

[6] 況：[接] “何況；况且” まして…をや。《兒女》8：那張金鳳接著問道：我看姐姐這等細條條的個身子，這等嬌娜娜的個模樣兒，～又是官宦人家的千金，怎生有這般的本領。

[7] 逢：[動] “遇到” 出会う。《二十》69：聽了他老太太的話，回到南京之後，～人便說，沒處不談。

[8] 此等：[代] “这种” このような、こんな。《二刻》9：自家道：～鋤強扶弱的事，不是我，誰人肯做。

- [9] 佳：[形] “美；好” 美しい、素晴らしい、よい。《紅樓》23：今忽見寶玉也有麒麟，便恐借此生隙，同湘雲也做出那些風流～事來。
- [10] 更：[副] “愈加；再” さらに、重ねて。《水滸》60：話說公孫勝對宋江、吳用獻出那個陣圖：～是漢末三分，諸葛孔明擺石為陣的法。
- [11] 何方：[代] “何处” 何處。《紅樓》39：寶玉又問他地名莊名，來往遠近，坐落～，劉老老便順口謊了出來。
- [12] 美：[形] “美丽” 美しい。《警世》28：說話的，只說西湖～景，仙人古跡。
- [13] 煩：[動] “相烦；烦劳” 煩わす。《兒女》11：如今難得遇見我恩官的少爺，敢～大哥把少爺請到寨裏用些酒飯，也見得我們的義氣。
- [14] 絳闕：[名] 王宮の門、宮城の深紅色の門。[転] 宮城、宮殿。《喻世》4：瑞煙浮禁苑，正～春回；新正方半，冰輪桂華滿。
- [15] 瑤臺：[名] “美玉砌的樓台；亦借指传说中的神仙居处” 玉で飾った美しい御殿。玉のうてな。玉樓。《紅樓》102：以致崇樓高閣，瓊館～，皆為禽獸所棲。
- [16] 須：[動] “需要” 必要とする。《官場》12：設或事情辦得順手，大家有面子；倘若辦得不好，大人只～往周某人身上一推。
- [17] 蓬萊：[名] 蓬萊。中国の神話で、渤海にあり仙人が済むという山。《老殘》1：無非風餐露宿，不久便到了登州，就在～閣下覓了兩間客房，大家住下，也就玩賞玩賞海市的虛情，蜃樓的幻相。
- [18] 且：[接] “又；而且” その上、しかも。《二十》70：雪舫道：就是這個難，並～用老媽子，也不容易用著好的。
- [19] 緣：[名] “机缘；缘分” 縁、ゆかり。《紅樓》2：却說嬌杏那丫頭便是當年回顧雨村的，因偶然一看便弄出這段奇～，也是意想不到之事。
- [20] 赤繩：[名] 夫婦の縁を結ぶという赤い繩。[転] 夫婦の縁。《水滸》98：當下被葉清再三攛掇，也是瓊英夫婦姻緣湊合，～系定，解拆不開的。
- [21] 暗地：[副] “私下；暗中” 暗に、ひそかに。《醒世》1：何不把瓊英、瓊真～兌轉，誰人知道。
- [22] 牽來：[動] “拉；引領向前” 引っ張る。《二十》79：凡遇了要應酬官場的事，無不請他來～線索，自己做傀儡。

日本語訳

隣り十里を買う、仁者まさに是の如かるべし。況んや此等の佳き山水に逢う、更に何方に是の美有らんや。絳闕、瑤台を煩わす無かれ、只此の便を用いるは蓬萊なり。且つ女兒の縁有る在り、姻縁の赤繩暗に牽き來たる。

——右調《清平樂》

原文

却說^[1] 明水鎮^[2] 有一個也上貴^[3] 的富家^[4]，姓^[5] 狄，名^[6] 宗羽，號^[7] 寅梁，雖是讀書^[8] 無成^[9]，

肚裏^[10] 也有半瓶之醋^[11]，混混蕩蕩的^[12]，嘗^[13] 要雌^[14] 將^[15] 出來，因家事^[16] 過得^[17]，頗^[18] 也有些俠氣^[19]，人也有些古風^[20]。

校注

[1] 却說：[副]“再说；且说；话说”さて、さて…を話しましょう。発話の言葉、話の場の転換に用い、後には前に言及されている人や事柄が再度もち出される場合が多い。《兒女》2：～一日忽然院上发下了一角公文，老爷拆开一看，原来是自己调署了高堰外河通判。

[2] 明水鎮：[名] 地名。《舊五代史》82：齊州奏，青州賊軍寇～。

[3] 上貴：[形]“高贵；尊重”高貴な。

[4] 富家：[名]“富裕之家；有钱人家”富裕な家、金持ち、富豪。《紅樓》91：到底～女子嬌養慣的，心上又急，又苦勞了一會，晚上就發燒。到了明日，湯水都吃不下。

[5] 姓：[動] …という姓である。《二十》21：却是我的一位姻伯，～王，名顯仁，表字伯述。

[6] 名：[動] …という名である。《兒女》23：原來這風水復姓端木，～渙，表字仲輿，他家世代相傳，專門精通《周易》河洛地理，安老爺家這塊墳地就是他乃翁在日看定的。

[7] 號：[動] …という号である。もとは名と字の他に付けた“別号”、後には名以外に付けた呼び名をいう。《孽海花》2：一個有須的老者。姓潘，名曾奇，～勝芝，是蘇州城內的老鄉紳。

[8] 讀書：[動]“上学；学习功课”学問する。名詞の用法がない。《儒林》2：他姊丈金有余來看他，勸道：老舅，莫怪我說你。這～求功名的事，料想也是難了。

[9] 無成：[動]“不成”。“没有成功；没有成就”成功しない、完成しない。《西遊》88：教訓不嚴師之惰，學問～子之罪。

[10] 肚裏：[名]“心中；胸中”腹の中、胸の中。《官場》30：走出大門，～尋思道：現在這一頭已經說好，那一頭如何尋人做媒呢。

[11] 半瓶（之）醋：[名]“比喻一知半解的知识或技术”半可通、なまかじり、一知半解、もと書物をよく読んでいない生半可の知識人を指す。《紅樓》64：內中有嗟嘆的，也有羨慕的，又有一等～的讀書人，說是喪禮與其奢易莫若儉戚的：一路紛紛議論不一。

[12] 混混蕩蕩（的）：[動]“晃晃蕩蕩（的）”。“晃蕩”のAABB重疊型。“摆动；摇晃”ゆらゆらと揺れる。《儒林》22：前面一個穿一件繭綢直裰，胸前油了一塊，後面一個穿一件元色直裰，兩個袖子破的～的，走了上來。

[13] 嘗：[副]“经常；常常”いつも、常に。[同音]“常”。当て字。《紅樓》3：這黛玉～聽得母親說，他外祖母家與別人家不同。

[14] 雌：[動][方]“(液体)射”(液体が)噴き出す。“雌出來”：噴き出す、出現する。[同義]冲；冒出。

[15] (雌)將（出來）：[助]“用于动词和表示趋向的补语之间”「接中辞」。“動詞＋將＋方向動詞補語”の用法は《醒世》には285回出現した。特徴：1、補語の方向動詞は殆ど複音節である。2、動詞と方向補語の組み合わせは動詞と方向補語の音節の数量によって制限されている。動詞が単音節の場合、方向動詞は複音節語でもよいし、単音節でもよい。動詞が複音節の場合、方向補語は一般に単音節語である。《儒林》7：本道來科考時，訪知你若再如此，斷不能恕了。喝聲：趕～出去。

[16] 家事：[名]“家庭情况；家境”家の状態、暮らし向き。《紅樓》115：惜春早已聽見，急忙坐起，說：你們兩個人好啊。見我們～差了，就不來。

[17] 過得：[動]“过得去；生活不很困难”（生活を）やっつけていける、暮らしが立つ。《紅樓》113：這兩年，姑奶奶還時常給些衣服布匹，在我們村裏算～的了。

[18] 頗：[副]“很；相当地”かなり、相当に。《二十》3：婦人低聲道：妾～懂得。制臺就叫他按摩。

[19] 俠氣：[名]“豪侠的气概”男氣、義俠、俠氣。時に人を殺めたり喧嘩したりする悪者の親玉の習性を指す。《喻世》2：那田氏象了父親，也帶三分～，見丈夫是個蠢貨，又且不幹好事，心下每每不悅。

[20] 古風：[名]“古人之風；指质朴淳古的习尚、气度和文风，也指质朴的生活作风”昔の風俗習慣、古い風俗。古風。質素な生活態度。

日本語訳

さて、明水鎮に、一人の裕富な貴ぶべき人物がいる。姓は狄、名は宗羽、号は賓梁という。学問には成功しなかったが、腹の中にある生かじりの知識が、ゆらゆらと、常に顔を覗かせている。生活は豊かで、すこぶる男気があり、人柄にも古人の風格がある。

原文

隔壁^[1]也開^[2]一個精緻^[3]的店，招接^[4]東三府往來^[5]的仕宦^[6]。飯錢^[7]草料^[8]，些微^[9]有些撰手^[10]就罷^[11]，不似^[12]別處^[13]的店家^[14]，拿住了死蛇^[15]，定要^[16]取個^[17]肯心^[18]。遇^[19]有甚麼貴重的^[20]客人^[21]，通^[22]像^[23]賓客^[24]一般款待^[25]，不留飯錢，都成了相知^[26]。往來的人都稱^[27]他爲狄員外^[28]。

校注

[1] 隔壁：[名]“左右两边相连的屋子或人家；邻居”隣り合った部屋または家、隣家、左右の隣家。[比較]“隔壁”は隣り合った部屋に限るが、“邻居”は隣近所の意味で、必ずしも隣り合った部屋ではない。《二刻》17：那坐的所在，與～人家窗口相對，只隔得一個小天井。

[2] 開（一個精緻的）店：[動]“开设创办商店；商店开始或进行营业”店を開く、商店を經營する。《警世》15：許宣自～來，不匡買賣一日興一日，普得厚利。

[3] 精緻：[形]“精美工巧”（製造の仕方が）精巧細緻である、念が入っている、丹念である、精密である。[比較]當時は「瀟洒である」の意味も使われているが、現代共通語では一般に使用しない。《紅樓》58：北靜王便命那太監帶了寶玉到一所極小巧～的院裏，派人陪著吃了飯，又過來謝了恩。

[4] 招接：[動]“招待接纳”招き接待する。《二十》11：他向來只同那些人～。

[5] 往來（的）：[動]“来去；往返”行ったり来たりする。《儒林》42：對著那河裏煙霧迷離，兩岸

人家都點上了燈火，行船的人～不絕。

[6] 仕宦：[名]“官員”役人。《金瓶》70：朱太尉令左右擡公案，當廳坐下，吩咐出來，先令各勛戚中貴～家人送禮的進去。

[7] 飯錢：[名]“吃飯吃菜而應付的費用”飯代、食費。《水滸》60：學究別了盧俊義，引了李逵，逕出城來，回到店中，算還房宿～，收拾行李包裹。

[8] 草料：[名]“牲口的飼料”まぐさ。《三國》99：大雨連降三十日，馬無～，死者無數，軍士怨聲不絕。

[9] 些微：[副]“略微；稍微”わずかに、少し。“微”は語尾。《官場》4：如果～潤色點，我旁邊人就替他硬做主。

[10] 撰手：[動]“獲利”儲ける、利潤を得る。[同音]“賺手”。当て字。

[11] 罷：[動]“算了”まあいいとする、それでいいとする。《兒女》7：女子道：你且莫哭，你耐性在這裏歇歇兒等候，不可亂走，等我務必給你尋來才～。

[12] 似：[動]“像”似る。《封神》14：一日回兵往翠屏山過，李靖在馬上看見往來來來，扶老攜幼，進香男女，紛紛～蟻，人煙湊積。

[13] 別處（的）：[名]“另外的地方”ほかの場所、他所。《水滸》67：宋江見報，只叫得苦：是我夜來沖撞了他這幾句言語，多管是投～去了。

[14] 店家：[名]“酒館、店舖的老板或伙計”宿屋・料理屋・飲み屋の主人あるいは番頭。《水滸》30：各～並各儲坊兌坊，加利倍送閑錢來與施恩。

[15] 拿死蛇：[熟]“比喻隨意敲詐勢窮力弱的人”反抗できない人に言い掛かりを付けて財物をゆする。

[16] 定要：[連]“一定；必須”きっと、必ず。《二刻》26：禦史再三推辭，～傍坐，只得左右相對。

[17] 取（個）：[動]“得到”求める、取る。《拍案》5：劉生想著李老之言，廣～財賄，毫無避忌。

[18] 肯心：[動]“甘心；稱心”甘んじる、満足する。《警世》40：當時若～歸正，却有金書取上天。

[19] 遇：[動]“相逢；遇到”出会う、出くわす。《兒女》8：這驢兒日行五百裏，但～著歹人，或者異怪物事，他便咆哮不止，真真是個神物。

[20] 貴重（的）：[形]“高貴；尊嚴”高貴である。[比較]現代共通語では、人に対して用いない。《官場》7：翻譯說：外國人請～客，都是主人自己把菜一份一份的分好，然後叫細崽端到客人面前。

[21] 客人：[名]“旅客；顧客”旅人、客。《二十》21：外面亂烘烘的人來人往，不知又是甚麼船到了，來了多少～。

[22] 通：[副]“很；十分”とても、非常に。[比較]現代共通語では“通红”にのみ用いる。《拍案》6：～誠已畢，趙尼姑敲動術魚，就念起來。

[23] 像：[動]似る。[轉]…のようである。[比較]當時では“像”“似”が口語でも使われている。しかし、現代共通語では“似”は書面語にのみ使われる。《拍案》5：眾人在屋縫裏張著，看那放下的東西，恰～個人一般，又恰象在那裏有些動。

[24] 賔客：[名]“貴族的門客、策士”賓客、食客、來客、權勢のある人の家に寄食している人、客分として抱える辛い、また客の総稱。[比較]“賔”は“賓”の異体字。《儒林》12：兩公子請遍了各位～，叫下兩只大船，廚役備辦酒席，和司茶酒的人另在一個船上；一班唱清曲打粗細十番的，又在船。

[25] 欸待：[動]“熱情優厚地招待”ねんごろにもてなす、丁寧にもてなす、飲待する、手厚くもてなす。[同音]“款待”。[比較]“欸”は“款”の異体字。《鏡花》83：子路半世在江湖上行走，受了人

家許多怠慢，今日肴饌雖然不豐，却也殷勤～，十分盡禮。

[26] 相知：[名] “互相知心的朋友” よく理解し合った友人、気心の知れた友、親友。《拍案》11：狂蜂浪蝶，天桃隊裏覓～。

[27] 稱：[動] “叫做；称作” …と呼ぶ。《兒女》1：雙名學海，表字水心，人都～他安二老爺。

[28] 員外：[名] 昔の官職。郎官の定員外として設けられた。宋代には商人に対しても用い、地主豪紳の類の尊称。《紅樓》78：寶玉說道：這是梅翰林送的，那是楊侍郎送的，這是李～送的，每人一分。

日本語訳

家の隣に綺麗な宿屋を開き、東三府を往来する役人を招いている。飯代やまぐさ代などは、わずかに稼ぐことができればよいといって、ほかの宿屋のように、ひたすらに、満足するまで金をむしり取ろうとすることはない。尊敬すべき客が泊まったりすると、賓客のようにもてなし、飯代をとらず、友人になる。往来する人々はみな彼のことを敬して狄員外と呼んでいる。

原文

一日間^[1]，有一頂^[2] 抬轎^[3]，一乘^[4] 臥轎^[5]，幾頭騾子^[6]，老早的^[7] 安下^[8] 店內。狄員外問那指使^[9] 的人說道：店內歇下^[10] 的是甚麼官人^[11]。回道：是一位老爺^[12]，一位奶奶^[13]，一位小夫人^[14]，一個使女^[15]，兩房家人^[16] 媳婦^[17]，三個管家^[18]，是河南衛輝府人，姓薛，原任^[19] 兗州府學^[20] 的教授^[21]，如今^[22] 陞了^[23] 青州衛府的紀善^[24]，前來^[25] 到任^[26]。

校注

[1] 一日間：[連] “有一天” ある日。《喻世》22：樞密院～連接了三道告急文書，朝廷大驚，乃以賈似道兼樞密使、京湖宣撫大使，進師漢陽，以救鄂州之圍。

[2] (一) 頂：[量] “用于某些有顶的东西” 帽子やテント等てっぺんが目を引くものを数える言葉。《金瓶》1：頭戴著一～萬字頭巾，上簪兩朵銀花；身穿著一領血腥衲襖，披著一方紅錦。

[3] 抬轎：[名] “用于肩抬的轿子” 担ぎ籠。

[4] (一) 乘 [shèng]：[量] “用以计算车子” 輿・駕籠などを数える。《水滸》44：只見那婦人起來，濃妝艷飾，包了香盒，買了紙燭，討了一～轎子。

[5] 臥轎：[名] “可以卧躺的轿子” 寢轎。《元史》101：陸站一百處，馬二千五百五十五匹，車七十輛，牛五百四十五只，坐轎一百七十五乘，～三十乘。

[6] 騾子：[名] “騾的俗称” ラバ。《兒女》3：雇了四頭長行～，他主僕三人騎了三頭，一頭馱載行李銀兩。

[7] 老早(的)：[副] “很早；甚早” とくに。[比較] “老早” + “就” 構造が一般的であるが、“老早” + “的” 構造もある。“老早” は“很早”の意味であるが、“早就” は“早已经”で、「ある事態

がすでに存在している」ことを表す。《二十》41：繼之道：他在關上一年，是足跡不出戶外的，此刻怎麼～就出去了呢。

[8] 安下：[動] “住下；安歇” 休む、宿泊する。[比較] “安下” は休むために「宿泊する」であるが、“安頓” はほどよくいろいろ配置して住むことである。“安頓” は住めるように更にいろいろと用意する感じが強い。《西廂記》第一本楔子：因此俺就這西廂下一座宅子～。

[9] 指使：[動] “差遣；使喚” 指図する。《水滸》74：頭領到此，必有～。

[10] 歇下：[動] “住下；安歇” 休む、泊まる。[比較] “歇下” は休む意味が強いが、“住下” はこの感じが強くない。《紅樓》66：大家一齊相見，說些別後寒溫，便入一酒店～，共敘談敘談。

[11] 官人：[名] “做官的人；官吏” 役所の人、役人。《警世》20：話說大宋徽宗朝有個～，姓計，名安，在北司官廳下做個押番，止只夫妻兩口兒。

[12] 老爺：[名] “对有一定身份的男子的尊称” 旦那様。官吏や権力者に対して用いた呼称。《水滸》17：～，今日事已做出來了，且通個商量。

[13] 奶奶：[名] “对已婚妇女的尊称” 奥様。既婚婦人に対する敬称。[比較] “夫人” は高官の妻に対する尊称。明清代、一・二品の階位の官吏の妻を称した。“奶奶” は既婚婦人への敬称で、息子の嫁や孫の嫁にも用いる。《兒女》22：因大～合他姑娘最好，消了閑兒，便把話悄悄的告訴了他家大～。

[14] (小) 夫人：[名] 奥様。古代諸侯の妻。明清代、一・二品の階位の官吏の妻を称した。現在では、妻の通称である。《紅樓》2：這政老爺的～王氏，頭胎生的公子名叫賈珠，十四歲進學，後來娶了妻，生了子，不到二十歲，一病就死了。

[15] 使女：[名] “婢女” 下女、女中、召使。《水滸》24：那清河縣裏有一個大戶人家，有個～，小名喚做潘金蓮。

[16] 家人：[名] “仆人” 使用人。ここでは「下男」を指す。《兒女》12：却說安老爺當日出京，～本就無多，自從遭了事，中用些的長隨先散了，便有那班一時無處可走且圖現成茶飯的，因養不開多人，也都打發了。

[17] 媳婦：[名] “妻子” 妻、女房。[比較] 接尾辞“子” が付接すると下男の妻を指す。“兒” が付接すると下男ではない、身分のある妻を指す。また、“媳婦” は一般に「息子の妻」を指すが、“老婆” は単に「妻」を指す。《兒女》12：安太太道：我細想這樁事，你～方才的話，是因你那日在廟裏辭婚，他得站住女孩兒的身分。

[18] 管家：[名] “为官僚、富室管理家产和日常事务而地位较高的仆人。也用作对一般仆人的敬称” 官僚や地主などの番頭・執事・用人がしらの敬称。《儒林》24：向知縣 沒奈何，只得把酒席發了下去，叫～陪他吃了。

[19] 原任：[動] “原先所担任的” もと勤めていた（所の）。《警世》6：那行者雙行流淚，拜告道：臣姓李名直，～南劍府太守。

[20] 府學：[名] “古代官学之一种。由府一级设立” 府が設けた学校。《金瓶》58：溫秀才道：學生不才，～備數。

[21] 教授：[名] 先生。塾の教師や読書人に対する尊称、もと宋代に各王府、各路の学府に置かれた教官の名称。《水滸》14：雷横便道：～不知，這廝夜來赤條條地睡在靈官廟裏，被我們拿了這廝。

[22] 如今：[名] “現在”（遠い過去と対比しての）今。《紅樓》78：我這～是天上的神仙來請，那裏捱得時刻呢。

[23] 陞（了）：[動] “（等級）提高”（等級が）上がる。《二刻》26：後來挨得出貢，選授了山東費縣教官，轉了沂州，又～了東昌府。

[24] 紀善：[名] “明代亲王属官名，掌讲授之职” 講読官。明・方孝孺《題會稽張處士墓銘後》：少子遜亦以通儒術薦為～。

[25] 前來：[動] “**到这里来；向这个方向来**” やってくる、出かけてくる。《紅樓》71：寶玉聽了，又喜又愁，只得忙忙換了衣服，～請安。

[26] 到任：[動] “到达任所就职” 「着任する」。《紅樓》99：凡有新～的老爺，告示出的越利害，越是想錢的法兒。”《儒林》5：一個是王德，是～廩膳生員。

日本語訳

ある日、一頂の轎と一乗の寝轎、数頭のラバが、早々と宿屋に休んでいた。狄員外は知らせにきた店番に尋ねた。「宿に休まれたのはどんなお方だね、お役人かい。」店番は答えて言った。「旦那さま、奥様、妾、下女、二人の下女の女房、三人の下男です。河南衛輝府の方で、姓は薛という方です。兗州府学の教授をされていましたが、今回青州衛府の講読官に昇任したので赴任するそうですよ。」

原文

狄員外又問：這官人約^[1] 有了多少^[2] 年紀^[3] 了。回說：也將近^[4] 五十來^[5] 的歲。極^[6] 和氣^[7] 的好人。狄員外自己^[8] 走過店去與^[9] 薛教授相見^[10] 了，敘了^[11] 些履歷^[12]。狄員外教家裏另^[13] 取過茶去吃^[14] 了。講話^[15] 中間，倒^[16] 像似^[17] 舊日^[18] 的相知一般。

校注

[1] 約：[副] “大概” およそ。《兒女》14：只見他家常打扮，穿條元青裙兒，單件月白襖兒，頭上戴些不村不俏的簪環花朵，年紀～有三十光景，雖是半老佳人，只因是個初過門的新媳婦，還依然打扮的脂光粉膩。

[2] 多少：[代] “几何；若干”（數量が）どのくらい。《官場》26：不禁高興之極，連說：如蒙厚翁割愛，要～錢，兄弟送過來就是。

[3] 年紀：[名] “年齡” 年齢。《紅樓》86：回到房中，看著花，想到：草木當春，花鮮葉茂，想我～尚小，便像三秋蒲柳。

[4] 將近：[副] “指數量等将要接近”（數量や時間が）…に近い、殆ど、間もなく。《封神》25：話猶未了，～一更時分，只聽得四下裏風響。

[5] （五十）來：[助] “用在数词或数量词后面，表示约略估计” 概数を表す、ふつうその数に達しないことを表すが、上下にやや幅をもたせることもある。《喻世》36：侯興一個兒子，十～歲，叫做伴哥，發脾寒，害在床上。

- [6] 極：[副] “最；非常” 極めて、最も。《紅樓》2：這甄府就是賈府老親，他們兩家來往～親熱的。
- [7] 和氣：[形] “态度温和” (態度が) おだやかだ。[比較] “和气生財” の構造は用いるが、“温和生財” の構造は用いない。そして、“和和气气” のAABB型の使い方もある。《金瓶》46：婆子道：你為人溫柔～，好個性兒。
- [8] 自己：[代] “自身；本身” 自分。《官場》22：你是明白人，你老爺不肯寫憑據給我，却要我同他一刀兩斷，～評評良心，這一點子是不好再少的了。
- [9] 與：[介] “和；跟” …と。《二十》1：人生世上，這“應酬”兩個字，本來是免不了的；爭奈這些人所講的應酬，～平常的應酬不同。
- [10] 相見：[動] “彼此会面” 出会う、相まみえる。《紅樓》4：姊妹們一朝～，悲喜交集，自不必說。
- [11] 敘(了)：[動] “述说” 話す。《二十》1：只見裏面所～的事，千奇百怪，看得又驚又怕。
- [12] 履歷：[名] “人的资格和经历” 履歷、経歴。《兒女》1：及至引見，到了老爺這排，奏完～，聖人往下一看，見他正是服官政的年紀，臉上一團正氣，胸中自然是一版至誠。
- [13] 另：[形] “別的；以外” 他の、別の。《二十》14：此刻請你把這知啟～寫一個，看看有不妥當的，同他刪改刪改，等我明天拿去。
- [14] 茶(去)吃(了)：[連] “吃茶”。“喝茶” 茶を飲む。[比較] “喝” は《金瓶》から使われているが、元明清時代において“吃” が最も多く使用される。現代共通語では、“飲” は口語から消失した。《紅樓》6：那鳳姐只管慢慢～，出了半日神，忽然把臉一紅，笑道：罷了，你先去罷。
- [15] 講話：[動] “谈话；说话” 話をする、発言をする。《兒女》14：安老爺道：既如此，請坐下好～。
- [16] 倒：[副] “却” 逆に。《二十》十四：等他叩完了頭，我～樂得不回避，聽聽他說話了。
- [17] 像似(舊日的相知)一般：[連] “像似…一般” …のようである。《醒世》7：但是聽他姑夫的口氣，還～沒帳的～，半夜三更，你只管打他待怎麼。
- [18] 舊日(的)：[名] “往日；从前” 過ぎ去った日、昔日、昔。[比較] 使用頻度では、清以前までは“往日” “旧日” 両方ともよく使われている。現代共通語では“旧日” はあまり使われなくなった。《紅樓》117：只有喜鸞、四姐兒是賈母～鐘愛的。

日本語訳

狄員外は更に尋ねた。「お年はどのくらいだ。」店番は答えて言った。「五十近くで、とても穏やかな、性格の良いお方です。」狄員外は自ら宿屋に出かけて、薛教授と会い、自分の事等も話した。狄員外は家から改めて茶を取って来させた。話をしていると、昔からの友人のように感じられた。

原文

狄員外別了^[1] 回家^[2] 來,分付^[3] 教^[4] 人好生^[5] 答應^[6]。薛教授也隨了^[7] 來狄員外家回拜^[8], 狄員外隨^[9] 設^[10] 小酌^[11] 相款^[12], 留^[13] 喫了^[14] 晚飯^[15]。說了更^[16] 把^[17] 天的話^[18], 薛教授方別了回到下處^[20]。

校注

- [1] 別（了）：[動] “分離” 別れる、別れを告げる。《古今》1：～了管典的，…。
- [2] 回家：[動] 帰宅する。《清平》快嘴：上轎～去了。
- [3] 分付：[動] “吩咐” 言い付ける、申し付ける。《古今》40：沈小霞～聞氏道：…。
- [4] 教：[動] “使；令” …させる。《金瓶》1：武大～婦人坐了住位，武松對席，武大打橫。
- [5] 好生：[副] “好好儿” 十分に、よくよく。[比較] “好生” には“很” 「とても」及び“好好儿”の意味がある。この両者の意義の消長を概観すると、宋元明代は状態副詞用(=好好儿)、程度副詞用(=很)が併用されていた。清代中期《紅樓夢》は程度副詞用が大幅に減少している。現代語では、状態副詞、程度副詞共に方言とする。印象としては、“好生”は現代に近づくほど状態副詞用が主と思われるが、待考とする。《金瓶》4：～看家，我往你王奶家坐一坐就来。
- [6] 答應：[動] “服侍” 面倒をみる。人に仕える。《金瓶》67：～我些時兒。
- [7] 隨（了）：[動] “在后面紧接着向行动” 後に付いていく。《清平》楊温：我先出去，你～我来。
- [8] 回拜：[動] “回访” 答礼訪問する。《儒林》17：次日，趙爺去～。
- [9] 隨：[副] “隨即” すぐさま。《兒女》4：～把個嗎褥子鋪在炕沿上，盤腿坐好，閉上眼睛。
- [10] 設：[動] “布置” 設ける。
- [11] 小酌：[名] ちょっと一杯やること。正式ではない宴会。《紅樓》1：具～。
- [12] 相欸：[動] ねんごろにもてなす。[同音] “相款”。[比較] “欸”は“款”の異体字。《警世》20：娘子見來，有備三盃～。
- [13] 留：[動] “使留” とどめる。《清平》洛陽：只可～在弊觀躲災。
- [14] 喫（了）：[動] 食べる。
- [15] 晚飯：[名] 晩飯、夕飯。《清平》陳巡檢：且說陳巡檢夫妻二人到店房中吃了些～，却好一更。
- [16] 更：[副] さらに。よりいっそう。
- [17] 把：[介] …を。[比較] “把”と“將”は兩者共に元動詞。唐代から介詞としての用法が生まれた。宋代～明末はどちらも口語として用いられたが、清初くらいから“把”は口頭語、“將”は書面語としての傾向が強くなっていった。
- [18] 天（的）話：[名] “闲话” 雑談。《型世》12：再要與你在這邊講些～，也不能勾了。
- [19] 方：[副] “才” やっと、漸く。《兒女》29：公子一直送出二門～回。
- [20] 下處：[名] “住处，多指临时住所” 下宿。《官場》2：找著～，安頓行李，…。

日本語訳

狄員外は別れて家に帰り、召使いに対してよく仕えるように言いつけた。薛教授も狄員外のすぐ後について家を訪問し、狄員外もすぐに少しのお酒を用意し、引き留めて晩御飯を食べてもらった。更に雑談をし、薛教授は漸く宿に戻った。

原文

第二日^[1]清早^[2]，薛教授送了四包^[3]糖纏^[4]，二斤^[5]高笋^[6]，狄員外收了^[7]，賞了^[8]管家五十文^[9]錢。又備了^[10]一個手盒^[11]，請^[12]過^[13]薛教授來送行^[14]。薛教授封了^[15]五錢銀飯錢^[16]送來^[17]，狄員外再三^[18]不肯^[19]收^[20]，薛教授只索^[21]罷了^[22]。

校注

- [1] 第二日：[連]“第二天”翌日。[比較]現代共通語では“日”は硬い表現である。
- [2] 清早：[名]“清晨”明け方。《兒女》40：三五起門生故舊從～就來了。
- [3] (四)包：[量]“用于包成的东西”包んだものを数える。
- [4] 糖纏：[名] 飴と木の実を主原料として作った食品。あめ菓子。
- [5] (二)斤：[量] 重量の単位。1斤=500g。
- [6] 高笋：[名] カキチシャ。野菜の一種。
- [7] 收(了)：[動]“接受”受け取る。
- [8] 賞(了)：[動]“赏賜”(上が下に金品を)与える。
- [9] (五十)文：[量]“钱币单位，一枚曰一文”銅錢の枚数を数える。《恒言》33：恰好是十五貫錢，一～也不多，一～也不少。
- [10] 備(了)：[動]用意する。《醒世》1：已～得十分。
- [11] 手盒：[名]“一种盛放肴饌或钱物的可携带的盒子”手箱。《拍案》15：賈秀才叫僕人將過一個小～，取出兩包銀子來。
- [12] 請：[動]“邀请”招く。《清平》張子房：～我王到茅庵，…。
- [13] 過(薛教授)來 [動]“从另一个地点向说话人(或叙述的对象)所在地來”やってくる。
- [14] 送行：[動]“到远行人起程的地方，和他告别，看他离开”送別する。《官場》2：一切～辭行的繁文，不用細述。
- [15] 封(了)：[動]“封闭”封じる。《初拍》1：另取三兩零銀～了，…。
- [16] 飯錢：[名] 飯代。《清平》楊溫：來店中還了房錢並～，却來茶坊里。
- [17] 送來：[動] 届けに来る。
- [18] 再三：[副]“一次又一次”何度も。
- [19] 不肯：[連]…しようとしなない。《金瓶》11：～做哩。
- [20] 收：[動]“接受”受け取る。
- [21] 只索：[副]“只得”仕方なく。旧白話語彙。《水滸》103：他若擺布得我緊要，～逃走他處。
- [22] 罷了：[動]“表示容忍，有勉强放过暂不深究的意思；算了”(仕方なく)まあいいとする。《金瓶》22：與客飲酒倒也～，…。

日本語訳

翌日の明け方、薛教授は四包みの飴菓子、二斤のカキチシャを送った。狄員外は受取り、持ってきた使いの者に五十文を与えた。また一つ手箱を用意し、薛教授に来てもらうように頼んだ。薛教授は五銭の飯代を送ると、狄員外は受け取れないと何度も言ったので、薛教授は仕方なくそれでいいことにした。

原文

只見^[1] 天氣^[2] 漸漸^[3] 陰^[4] 來, 就^[5] 要^[6] 下雨的光景^[7], 狄員外苦留^[8], 說: 前去^[9] 二十里^[10] 方是二十里舖^[11], 都是小店^[12], 歇不得^[13] 驢馬^[14]。再^[15] 二十里方縣城^[16]。這雨即刻^[17] 就下^[18], 不如^[19] 暫候^[20] 片時^[21]。如^[22] 天色^[23] 漸次^[24] 開朗^[25], 這自然^[26] 不敢^[27] 久留^[28]; 若是^[29] 下雨, 這裏房舍^[30] 草料^[31] 俱^[32] 還^[33] 方便^[34], 家常飯^[35] 也還^[36] 供^[37] 得起^[38] 幾^[39] 頓^[40]。

校注

- [1] 只見：[動] ふと見る。《宣和》：那後生被楊志揮刀一斫，～頸隨刀落。
- [2] 天氣：[名] “气候” 天氣。《金瓶》2：才見梅開臘底，又早～回陰。
- [3] 漸漸：[副] [書] “逐漸” だんだんと（…になる）。《兒女》16：聽到後來，～兒的把個脖頸低下去，默默無言，只瞅着那杯殘酒發怔。
- [4] 陰（來）：[形] 曇っている。
- [5] 就：[副] “即；便” すぐに。《警世》2：妾思新筑之土，如何得～幹，因此舉扇搨之。
- [6] 要：[副] “將；將要”（…し）そうである。
- [7] 光景：[名] “様子” 様子。《恒言》22：這班隨從得人打扮出路～。
- [8] 苦留：[動] しきりに引き留める。《古今》18：槩氏～不住，只得聽從。
- [9] 前去：[動] “往前去” 前へ進み行く。
- [10] (二十)里：[量] “长度单位” 長さの単位。1里=500m。
- [11] (二十里)舖：[名] “驛站” 宿場。《拍案》3：行得一二～，遙望見少年在百步外，正弓挾矢，扯個滿月。
- [12] 小店：[名] 小さく粗末な宿屋。
- [13] 歇不得：[動] 休息できない。《水滸》39：他又無老小，只止本身，只在城隍庵間壁觀音庵里～。
- [14] 驢馬：[名] “轿子和車馬” 籠と馬車。《水滸》20：林冲等一行人，請晁蓋上了～。
- [15] 再：[副] “表示又一次” その上。
- [16] 縣城：[名] “現行行政机关所在の城镇” 県都、県城。
- [17] 即刻：[副] [書] “立刻” すぐさま。[比較] “立刻” は口頭語・書面語どちらにも用いる。《紅樓》46：南京的房子還有人看着，不止一家，～叫上金彩來。
- [18] 下：[動] (雨が) 降る。

- [19] 不如：[動] (…に) 及ばない。
- [20] 暫候：[動] [書] “暫等” しばらく待つ。
- [21] 片時：[名] [書] “片刻” わずかの時間。《紅樓》6：又到周端家坐了～。
- [22] 如：[接] “如果” もしも。《金瓶》3：大官人～幹此事， …
- [23] 天色：[名] “天气的颜色” 空模様。《古今》15：今日雪下， ～寒冷， 見你過去， 特趕來相請， 同飲數杯。
- [24] 漸次：[副] [書] “渐渐” 段々と。《警世》22：盧氏擲持不定， 只得將田房～賣了， 賃屋而居。
- [25] 開朗：[形] “地方开阔， 光线充足” (空間が) 広々として明るい。[比較] 現代共通語では「性格が明るい」ことを言う。「空が明るい」は現代共通語で“晴朗”。
- [26] 自然：[名] もちろん。
- [27] 不敢：[連] 敢えて…しない。
- [28] 久留：[動] [書] “长时间地停留” 長くとどまる。
- [29] 若是：[接] “如果” もし…ならば。
- [30] 房舍：[名] 家。《三俠》5：到了趙大門首， 只見～煥然一新， 不敢敲門。
- [31] 草料：[名] “喂牲口的饲料” まぐさ、家畜に食べさせる飼料。《水滸》2：小人母親騎的頭口， 相煩寄養， ～望乞應付， 一發拜還。
- [32] 俱：[副] “全、都” すべて。《醒世》4：酒味醇美， 其甘如飴， ～非人世所有。
- [33] 還：[副] まずまず。
- [34] 方便：[形] “便利” 便利である。
- [35] 家常飯：[連] “家常便飯” 日常生活での家庭の食事。
- [36] 還：[副] “表示重复” その上に。《二拍》17：你～到他衙中間問看。
- [37] 供：[動] 提供する。
- [38] 得起：[接尾] 財的能力上できるという意を添える。可能補語。《醒世》10：顧～。
- [39] 幾：[数] “表示不定的数量” 不定の数を表す。《清平》風月相思：～回夢裡與子飛揚。
- [40] 頓：[量] “吃饭的次数” 食事の回数を数える。《清平》陳巡檢：一日與他三～淡飯。

日本語訳

ふと見ると空はだんだんと雲ってきて、もうすぐ雨が降り出しそうだった。狄員外は引き留めて言った。「二十里行って漸く宿場がありますが、みな小さく粗末な宿屋です。籠も馬も休めません。更に二十里行くと漸く京都です。雨はすぐに降り出しますから、暫く待つ方がいいでしょう。空模様がだんだんと明るくなれば、長く留まることはないのです。雨が降れば、ここには家畜用のまぐさもありますからまずまず便利でしょう。豪華とはゆきませんが、食事もお出しすることができます。」

原文

一邊^[1] 挽留^[2]，一邊雨果然^[3] 下了^[4]，薛教授只得^[5] 解了^[6] 行李^[7]，等^[8] 那天^[9] 晴^[10]。從來^[11] 說：開門^[12] 雨，飯^[13] 了^[14] 晴^[15]。偏^[16] 這一日陰陽^[17] 却是^[18] 不準^[19]，不緊不慢^[20]，只是^[21] 不止^[22]。看看^[23] 傍午^[24]，狄員外又備了^[25] 午飯^[26] 送去^[27]，薛教授合^[28] 他渾家^[29] 商議^[30] 道：看來^[31] 雨不肯住^[32]，今日^[33] 是走不成了^[34]。悶悶的^[35] 坐^[36] 在這裏，不如^[37] 也收拾^[38] 些^[39] 甚麼^[40]，沽些酒^[41] 來與^[42] 狄東家^[43] 閑坐^[44] 一會^[45]。

校注

- [1] 一邊：[名] ここは連用する場合。“表示一个动作跟另一个动作同时进行”（連用する場合）…しながら…する。《小韻》：～兒喝，～兒說。
- [2] 挽留：[動] “使要离去的人留下来” 引き留める。《古今》10：迪再三～，不覺失手，二吏不見了。
- [3] 果然：[副] “果真” 思ったとおり。《清平》洛陽：去床頭看時，～有個大窟窿。
- [4] 下（了）：[動]（雨が）降る。
- [5] 只得：[副] “只好” 仕方なく。《清平》五戒：清一推拖不過，～走到山門邊。
- [6] 解（了）：[動]（縛ったり結んだりしたものを）解く、緩める。《清平》楊溫：便令左右～了索，請上廳對坐。
- [7] 行李：[名] “出門人携帯の衣服、箱籠等”（旅の）荷物。《官場》43：馬上動手把他的～送到岸上。
- [8] 等：[動] “等待” 待つ。《古今》39：～得不耐煩。
- [9] 天：[名] “天空” 空。
- [10] 晴：[形] 晴れている。
- [11] 從來：[副] “从前到現在；一直” 昔から、從來。
- [12] 開門：[連] 門・戸を開く。
- [13] 飯：[名] 食事。
- [14] 了：[動] “完成；結束” 終わる、終える。[比較] “了” はもと動詞で、“了” が助詞化したのは宋代頃からである。また、[le] と読まれるのは極めて新しく、近世語では一般に [liǎo] と読音。
- [15] 晴：[形] 晴れている。
- [16] 偏：[副] “偏偏” 生憎。《金瓶》2：自古駿馬却駝癡漢走，美妻常伴拙夫眠。月下老～這等配合。
- [17] 陰陽：[名] 陰と陽。中国古代哲学で、宇宙に存在するすべての物質や人間社会に共通する二大対立要素。天文・占い・墓地や家屋の方位学などを指す場合もある。ここでは占いを指す。
- [18] 却是：[副] なんと。ある行動・行為がそれ以前の動作行為と反対または、予想外を表す。
- [19] （不）準：[形] 正確である。
- [20] 不緊不慢：[成] 急ぎもせずゆっくりもせず。悠々としたさま。[比較] 現代共通語では天候には一般に用いない。
- [21] 只是：[副] “仅是” ただ（…するだけ）。《二十》5：那掌櫃聽了我的話，～嘆氣。
- [22] 不止：[動] とまらない。《三俠》49：不多時員外出來，見了公差江樊，只嚇得驚疑～。
- [23] 看看：[副] “眼看” 見る見るうちに。《金瓶》5：看着武大一絲沒了兩氣，～待死。

- [24] 傍午：[動] 昼近くになる。
- [25] 備（了）：[動] “置備” 用意する。《醒世》1：已～得十分。
- [26] 午飯：[名] 昼飯。《京本》15：當下吃了～，丈人取出十五貫錢來。
- [27] 送去：[動] 届ける、届けて行く。
- [28] 合：[介] “和” …と。
- [29] (他) 渾家：[名] “妻子” 妻。[比較] 旧白話語彙。《拍案》33：女婿看過，大喜，就交付～收訖。
- [30] 商議：[動] 相談する。《三國》95：凡事～停當而行，不可輕易。
- [31] 看來：[副] “表示经观察而做出判断” 見たところ。《二拍》9：～他是個少年書生，高才自負的。
- [32] 住：[動] 止まる。
- [33] 今日：[名] “今天” 今日。[比較] 現代共通語では“今日”は“今天”よりも硬い感じがある。《水滸》40：～甚風吹得到此。
- [34] (走) 不成（了）：完成・実現することができないことを表す。可能補語。
- [35] 悶悶（的）：[形] “烦闷” くさくさしているさま。
- [36] 坐：[動] 腰掛ける。《清平》洛陽：中間里～着赤土大王。
- [37] 不如：[動] (…に) 及ばない。
- [38] 收拾：[動] “置備（飲食）”（食事を）用意する。[比較] 《現代汉语词典》第六版によると、“收拾”には“准备”の意味がない。しかし、“收拾行李”の“收拾”は「準備する」「(荷物を) 片付ける」の二種の意味がある。《恒言》27：～些粥湯吃了，又做半夜生活，方才睡臥。
- [39] 些：[数] “表示不定数量，一般指少量” 不定の数を表す。ふつう少量を指す。《水滸》4：你今日詐得百姓許多財物，如何不借我～。
- [40] 甚麼：[代] “虚指，指示不肯定的事物” それ自体では何も指さないで、はっきりしない物事を表す。《水滸》4：却才只道老漢引～郎君子弟在樓上吃酒。
- [41] 沽（些）酒：[連] “买酒” 酒を買う。《水滸》7：～了兩三擔～。
- [42] 與：[介] “跟、同” …と、…に。
- [43] (狄) 東家：[名] だんな様。使用人や招聘されたりしている者が主人をこう呼んだ。《兒女》2：那師爺聽得～過來了，連忙換上了帽子，作揖迎接。
- [44] 閑坐：[動] (友などを尋ねて) 暇つぶしに雑談する。
- [45] 一會：[名] “指很短的时间” しばらく；短い時間を指す。《警世》1：二人酒杯酬酢了～，子期寵辱無驚，伯牙愈加愛重。

日本語訳

引き留めているうちに、やはり雨は降り出し、薛教授は仕方なく荷物を解き、空が晴れるのを待つことにした。昔から「戸を開けると雨でも、食事が終われば晴れる」と言う。生憎この日の天候占いは正確ではなく、雨はしとしとと降り、止まない。すぐに昼近くになり、狄員外はまた昼飯を用意して届けに来させた。薛教授は妻と相談して「この様子では、雨は止まないだろう。今日は出発できない。じつとここに腰掛けているよりは、何か肴を用意し、酒を買ってきて狄東家と暫く話した方がま

しだな。」と言った。

原文

薛奶奶^[1]道^[2]：醬斗内^[3]有^[4]煑熟^[5]的臘肉^[6]醃雞^[7]，濟南^[8]帶來的肉鮓，有甜蝦米、豆豉、蒿芽。再^[9]着^[10]人去買幾件鮮嘎飯^[11]來。也做了好些^[12]品物^[13]，携^[14]到店儘後^[15]一層樓上，尋了一大瓶極好的清酒^[16]，請過狄員外來白話賞雨^[17]。真是：一遭生，兩遭熟^[18]，越發^[19]成了相知^[20]。

校注

[1] (薛) 奶奶：[名] “尊称有身份的已婚妇女” 奥様。《紅樓》101：如今老爺放了外任，或者接家眷來，順便回家，～可不是衣錦還鄉了。

[2] 道：[動] “说” 言う、話す。《兒女》8：張金鳳聽了，忙站起來福了一福，～：原來是位千金小姐。

[3] 醬斗内：[名] 味噌榾の中。《醒世》23：二人從～取出的豆豉醃雞，盛了兩碟，斟上酒，看着尚書道：請這邊同喫一鍾如何。

[4] 有：[動] …がある。《兒女》8：姑娘說：既沒睡，下炕來，～話合妳說。

[5] 煑熟：[動] よく煮る、よく煮える、炊き上がる。《醒世》53：擡到家中，剝了皮，～了肉，家裏也吃，外邊也賣。

[6] 臘肉：[名] 塩漬けして干した肉。《醒世》38：連春元叫人送了吃用之物：～、响皮肉、羊羔酒、米、面、炒的棋子、焦餅。

[7] 醃雞：[名] “腌的鸡” 塩漬鶏。《醒世》23：二人從醬斗内取出的豆豉～，盛了兩碟，斟上酒，看着尚書道：請這邊同喫一鍾如何。

[8] 濟南：[名] 現代山東省の省都。《聊齋》7：辛未，朱文宗案臨～，試後，諸友請決第等。

[9] 再：[副] また、さらに。《兒女》8：～如那清官能吏，勤儉自奉，剩些廉俸；那買賣經商，辛苦販運，剩些資財；那莊農人家，耕種刨鋤，剩些衣食；也叫作有主兒的錢。

[10] 着(人)：[動] “差；打发”(人)を遣わす。《老殘》15：老殘與黃人瑞正在東牆～人救火，只見外面一片燈籠火把，縣官已到，帶領人夫，手持撓鉤長桿等件，前來救火。

[11] 鮮嘎飯：[名] 新鮮な肴。

[12] 好些：[數] “好多” たくさん。《紅樓》108：豈知園内早藏下了幾個在那裏接賊，已經接過～。

[13] 品物：[名] “东西” 食べ物。《明史》15：壬戌，減供禦～，罷明年上元燈火。

[14] 携：[動] “拿” 持つ。《紅樓》23：那日正當三月中浣，早飯後，寶玉～了一套《會真記》，走到沁芳閨橋那邊桃花底下一塊石上坐着，展開《會真記》，從頭細看。

[15] 店儘後：[連] 店の一番奥のところ。

[16] 清酒：[名] 清酒。《明史》27：～方獻，百執事有虔。

[17] 白話賞雨：[連] “边说话边赏雨” 話をしながら雨を眺める。

[18] 一遭生，兩遭熟：[熟] “第一次见面比较生疏，第二次就熟悉了” 初め会ったときは見ず知らず

でも、二度目からは友人。《醒世》42：這魏氏～，兩遭熟，三遭就會，四遭也就成了慣家。

[19] 越發：[副] “越来越” ますます。《金瓶》59：～晝夜守著哭涕不止，連飲食都減了。

[20] 相知：[名] 知り合い。“越發成了相知”で“相互了解；关系好”仲が良くなる。《紅樓》9：如今秦寶二人一來了，見了他兩個，也不免繾綣羨愛，亦知系薛蟠～，未敢輕舉妄動。

日本語訳

薛奥様は「味噌榊の中に、よく煮た干し肉、塩漬鶏、済南から持ってきた塩漬肉、そして甘い小蝦、豆豉、タケノコがあります。また人を遣って幾品かおかずを買って来させましょう。」と言った。またたくさんの料理を作って、宿屋の二階の一番奥に持って行った。また、大きな瓶に入った極上の清酒を探して来た。そして、狄員外を招いて、話をしながら雨を眺めていた。まさに「初めて会ったときは見ず知らずでも、二度目からは友人」で、ますます仲が良くなった。

原文

這番並不^[1]説閑話^[2], 叙起^[3]兩個的家常^[4]。薛教授自說是衛輝府胙城縣人, 名字叫做薛振, 字起之, 十七歲補了廩^[5], 四十四歲出了貢^[6], 頭一任^[7]選金鄉的訓導^[8], 第二任陞^[9]了河南杞縣的教諭^[10], 第三任陞了兗州府的教授, 剛^[11]八個月, 陞了衡府的紀善^[12]。

校注

[1] 並不：[副] “并没有” 決して…（ではない）、別に…（ではない）。《兒女》12：莫如直捷痛快的盡情一吐，便是有幹嚴怒，也合受一場教訓。便回道：～曾求着親友。

[2] 説閑話：[動] “闲聊” 無駄話をする。《紅樓》26：説著，丫鬟倒了茶來，吃茶～兒，不在話下。

[3] 叙（起）：[動] “聊” 話す、述べる、語る。《紅樓》49：走至半路泊船時，遇見李執寡孀，帶着兩個女兒，長名李紋，次名李綺，也上京，大家～來，又是親戚，因此三家一路同行。

[4] 家常：[名] “家常话” 家庭日常生活の。《老殘》10：又說了許多～話，遂立起身來，告辭去了。

[5] 補（了）廩：[動] “做廩生” 廩生になる。《儒林》36：後來這幾位宗師，不知怎的，看見門生這個名字，就要取做一等第一，～。

[6] 出（了）貢：[動] “做貢生” 貢生になる。《儒林》6：因前任學臺周老師舉了弟的優行，又替弟考～；他有個本家在這省裏住，是做過應天巢縣的，所以到省去會會他。

[7] 頭一任：[連] “第一任” 最初の仕事・任務。

[8] 訓導：[名] 訓育係。《明史》列傳 186：隱逸正德元年，遙授儒學～。

[9] 陞：[動] “升迁” 昇任する。《儒林》3：荏苒三年，～禦史，欽點廣東學道。

[10] 教諭：[名] “监考人員” 明清時代、各県の科挙の試験の責任者を指した。《明史》292 列傳 180：誌仁急偕典史單思仁、～吳鳳來、訓導盧大受督民守禦。

[11] 剛：[副] “仅；只” わずか、ただ。《二刻》71：～兩三日，只見一日一乘轎來擡了去，已將他賣與城外一個富家為妾了。

[12] 紀善：[名] “紀善” 職業の名前。《醒世》42：他说：掌管三千名～靈童，一萬名紀惡童子，一百萬巡察天兵。

日本語訳

今回は無駄話をせず、二人の家庭の日常生活の話をした。薛教授は「私は衛輝府胙城県の者で、名は薛振、字は起之といい、十七歳で廩生、四十四歳で貢生になりました。初めは金郷の訓導、次に河南杞県の教諭、その次に兗州府の教授になり、わずか八か月ですが、衡府の紀善に昇任しました。

原文

這幾年積下^[1]些微^[2]束修^[3]，倒苟且^[4]過的^[5]日子，只因^[6]家中有一個庶母弟^[7]，極是個惡人^[8]，專一^[9]要殺兄爲事的。今五十二歲，尚無子女，所以^[10]只得要回避^[11]他，不然^[12]，也還可以^[13]不來做這個官的。

校注

[1] 積下：[動] “攢下” 貯める。《金瓶》56：慳吝的，～許多金寶，後來子孫不好，連祖宗墳土也不保。

[2] 些微：[形] “一点儿” わずか、少し。《醒世》65：張茂實道：這其實一個同窗家，沒點情分，～的東西，就收錢，甚麼道理。

[3] 束修：[名] “(送给教师的) 酬金” 月謝。《醒世》98：莊戶極其恭敬，～之外，往家中供送柴米，管顧衣裳。

[4] 苟且：[形] “得过且过” いいかげんである、なおざりである。《醒世》35：這幾年積下些微束修，倒～過的日子。

[5] 的：[助] “得”。動詞の後ろについて、その状態（程度または結果）についての説明を後に導く。

[6] 只因：[接] ただ…のため。[比較] “因为” とほぼ同じ。《兒女》1：那時候公子的身量也漸漸的長成，出落得目秀眉清，溫文儒雅。～養活得尊貴，還是乳母丫鬟圍隨著服侍。

[7] 庶母弟：[名] 父の妾の弟。

[8] 惡人：[名] “坏人” 悪者。《兒女》3：照這樣講起來，豈不是好人也不得好報，～也不得好報，天下人都不必苦苦的作好人了。

[9] 專一：[副] “一心一意” 專一、一心不乱である。《金瓶》57：～在士夫人家往來，包攬經讖。

[10] 所以：[接] “因此” 因果關係を述べる文で結果・結論を表す。《拍案》10：～年過二九，尚未有親。

[11] 回避：[動] “避开” 避ける。《二刻》25：不曾提防的，～不及，打著腦蓋骨，立時粉碎，嗚呼哀哉了。

[12] 不然：[接] そうでなければ。《拍案》30：～酒伴寂寥，雖是盛筵，也覺吃不暢些。

[13] 可以：[助動] “能够”できる。《拍案》7：得了胎息之道，～累日不食，不知多少年歲。

日本語訳

ここ数年は少しだけ束修を貯め、なんとか生活できましたが、家にいた異母弟が、大変な悪人で、どうしても私を殺そうとしたのです。今は五十二歳ですが、息子、娘はまだいませんので、奴を避けなければなりません。そうでなければ、ここに来て役人をしなくてもいいのです」と言った。

原文

狄員外問：還是^[1]有子不舉^[2]。還是從來^[3]不生。薛教授道：自^[4]荆人^[5]過門^[6]，從來不曾^[7]生長^[8]。狄員外說道：何不^[9]納寵^[10]。薛教授說：“昨^[11]臨來的時節，也只得^[12]娶了^[13]一人，但不曉^[14]天意^[15]如何^[16]哩^[17]。”

校注

[1] 還是：[副] 或いは、それとも。《拍案》39：～縣宰相公再行敦請，是必要他一來便好。

[2] 不舉：[動] “生了孩子不抚养” 子供を生んで養育しない。

[3] 從來：[副] “一直” いままで、これまで、かつて。《拍案》1：～稀有，互古新聞。

[4] 自：[介] “自从” …より。《拍案》10：又問道：那上邊寫道：～幼不曾許聘何人，却怎麼說。

[5] 荆人：[名] 夫が自分の妻を言う。《醒世》61：狄希陳道：據老丈這等說起來，在下的妻妾宮合該懼內，～的夫主宮應合欺夫，難道是天意湊合的。

[6] 過門：[動] “嫁入” 嫁入りする。《紅樓》109：這寶玉固然是有意負荆，那寶釵自然也無心拒客，從～至今日，方才是雨賦雲香，氤氳調暢。

[7] 不曾：[副] “未有” 曾て…したことがない。《二刻》17：此時偶然家中接小弟，就把竹箭掉在撰之處，～取得。

[8] 生長：[動] “成長” 成長する。《金瓶》17：竹山道：似娘子這等妙年，～深閨，處於富足，何事不遂，而前日有此郁結不足之病。

[9] 何不：[副] “为什么不” (反語) どうして…しないのだ、…したらいいじゃないか。《拍案》29：～等兒子送飯時，教他去與鄒老人商量。

[10] 納寵：[動] “纳妾” 妾をとる。《醒世》25：狄員外道：老丈到了五十二歳方才～，可見這娶妾是不容易講的。

[11] 昨：[名] 以前、過日。《三國》38：～兩次晉見不得一見。

[12] 只得：[副] “只好” …するほかない、…せざるを得ない。《拍案》29：～一一招承道：去年某月某日，呂大懷著白絹下船。

[13] 娶（了）：[動] “迎娶” 嫁をもらう。《金瓶》35：原來吳大舅子吳舜臣，～喬大戶娘子侄女兒鄭三姐做媳婦兒，西門慶送了茶去，他那裏來請。

[14] 不曉：[動] “不知道” 分からない。《拍案》31：～得他兩個妖術已成，都遁去了。

[15] 天意：[名] “上天的意思” 自然の理；天の意思。《明史》190 列傳 78：～如此，陛下可不思變計哉。

[16] 如何：[代] “怎么样” どのようであるか。《兒女》2：老爺如今就這五十兩公分，～下得去。

[17] 哩：[助] [比較] 共通語の“呢” にほぼ同じ。ただ疑問文には一般に用いられない。《老殘》13：其實，俺媽在這裏頭算是頂善和的～。

日本語訳

狄員外は尋ねた。「息子さんは生まれたのに養育できなかったのですか。それとも初めからいなかったのですか」。薛教授は「妻を娶ってから、一人も生まれていないのです」と答えた。狄員外は「妾をとられては如何ですか」と聞いた。薛教授は「過日、ここへ来るときに、仕方なく一人娶ったのですが、天がどう思われているかは分かりません」と言った。

【付記】

4名連記の分担は、順に1人約300字程度の原文一段落について、語彙注釈及び日本語訳稿を提出する。それを皆で検討修正を加えた。何度も修正したが、最終確認をしたのは植田均である。したがって、誤謬などの全責任は植田均が負う。大方のご叱正を賜れば幸いである。

【主要参考文献】

- 董遵章，《元明清白話著作中山东方言例釋》，齊魯出版社，1993年。
 白維國，《白話小說語言詞典》，商務印書館，2011年。
 周定一，《紅樓夢語言詞典》，商務印書館，1995年。
 北京大學中國語言文學系語言學教研室，《漢語方言詞匯》（第二版），語文出版社，1995年。
 許寶華、宮田一郎，《漢語方言大詞典》（全5冊），中華書局，1996年。
 《漢語拼音詞匯》編寫組，《漢語拼音詞匯》（1989年重編本），語文出版社，1991年。
 大東文化大學中國語大辭典編纂室，《中國語大辭典》，角川書店，1994年。
 太田辰夫，《中國語歷史文法》，江南書院，1958年。
 太田辰夫，《中國語文論集〔語學・元雜劇篇〕》，汲古書院，1995年。
 太田辰夫，《中國語史通考》，白帝社，1988年。
 香坂順一，《白話語彙の研究》，光生館，1983年。
 香坂順一，《《水滸》語彙と現代語》，光生館，1995年。
 香坂順一，《《水滸》語彙の研究》，光生館，1987年。
 植田均，《《醒世姻緣傳》方言語彙辭典》，白帝社，2016年3月刊予定。